江戸・明治期の随筆類における富士信仰

大谷 正 幸

ここでは、厳密にエッセイのみならず、名所案内・地誌・年中行事の紹介などといった、富士信仰の部外者によって富士信仰への記述を主としない目的の為に書かれたものを一括して便宜的に「随筆」と呼ぶことにしたい。

江戸時代から明治にかけて、そういった、外部から見た富士信仰の記述を収集してみると、ジョアン・ロドリゲスの『日本教会史』を始めとして六五タイトル一二四項目に上った。これらの記事を観察すると、明確な傾向をいくつか指摘することができる。

一、富士講が目立ち始める寛政期ごろ以前、江戸の富士信仰といえは駒込・浅草の浅間神社が定番であり、特に駒込の富士詣とよばれる市をとまなう祭礼に代表された。

一、角行系富士信仰に関する記事は安永八年（一七七九）の『大抵御覧』にあらわれる高田富士（東京都新宿区西早稲田）のものが最初であり、以後、富士講そのものよりは富士塚に関する記事が多い。

一、角行系について彼ら随筆筆者たちの印象は決して好ましいものではない。例えば、

漢の張角、黄巾の賊も始めはかゝる者にや有ん

（松浦静山『甲子夜話』）

（富士塚へ）恙なく上下すれば、後生よく有難など巷談して、草臥つらしに登り下りする徒もあり、愚盲の甚しき、是近年富士講といふもの天行で、元来の訳もわきまへず、処々に連をむすび、行衣を着して、鈴をならし徘徊し、講がしらなどいふもの出来て（中略）天行がゆへ也

（十方庵敬順『遊歴雜記』）

など。彼らの批判は、富士講や不二道の行動や言動が愚かしいという点と、にもかかわらずその動員が多い点に集中しているようにみえる。

一、当事者に近い側（但し富士講徒ではない）から書かれたものには批判色が無く、威儀や行動を讃える傾向にある。また、明治に入ると旧来の富士講との変質も指摘される。

幕府時代に於て富士講の盛行するや、悪弊百出、而して数度の制令、猶ほ之を禁遏する能はざりしも、維新後に及び、……富士講の如き邪教は日に増し萎微廢滅に瀕せり……迷信の度漸く薄らぎ、苦行など為す愚物は殆んど見るべからず、富士詣を名として行樂的の巡礼をなすこと一般の風習なり

（久保天随『富士行者』）

一、京都・奈良の富士信仰についての記述は江戸時代前半に集中しており、江戸に先駆けて「富士講」の語も見られる（享保十五年ごろの『奈良坊目拙解』）が、その後の記述が見られず、衰退していったらしい。

これらの傾向を江戸や関東の富士信仰史と重ねると、富士信仰のあり方について強い示唆が得られるのではないだろうか。特に、富士講が世に広く知られる以前には一般的に富士信仰と

いえば駒込・浅草の浅間神社や駒込の富士詣を専ら示していた点・随筆類を書くような知識層（上は大名から下は市井の僧侶まで）は富士講（不二道）を批判的かつ嘲笑的にみていた点などは、富士信仰内部の史料や民俗としての富士講を追うだけでは決して得られない外界の反応である。富士信仰内外を複眼的に捉えることで、より具体的な彼らの実態をより正確に把握できるものと思われる。

鎌倉時代の夢信仰の一断面

——沙石集を中心として——

河 東 仁

『沙石集』は、無住（一二二六—一三二二）によって著された、鎌倉期の説話集である。序に記されているように、王朝期以来の伝統的な文学観を継承し、世俗的な話題を通して、仏教の教義を平易に説き明かそうとしている。そのため後世へ大きな影響をもたらし、ことにその滑稽譚は、江戸文学の先駆けになったともされる。

無住は鎌倉で生まれ、十八歳のとき得度、関東や大和の諸寺にて密教や禅など諸宗を修め、一宗一派に偏らぬ諸宗綜合の立場をとった。また神仏習合を明確にうちだしたことも知られる。

このため『沙石集』は、従来の研究においては、理論的体系に裏づけられていない雑駁なものともみなされがちであった。し

かしこうした神仏混淆は、まさにこの頃の精神状況を映し出したものであり、鎌倉時代の夢信仰を知る上で看過できないものと言えよう。

『沙石集』全十巻のなかに記された一五〇条あまりの説話のなかで、実夢について語っている話は全部で四九例を数えることができる。ただしこれは、幻覚体験（白昼夢）五話を含めての数である。そしてこれらの夢譚を内容に沿って分類すると以下のようなになる。

- a 神祇信仰に関わるもの——現世へ執着することの非を論ずる神、仏法の教説を教える神、道心のなさを非難する神、僧への非礼をとがめる神、往生を確約する神、無実の罪をはらす神、非力を告白する神、死穢を厭わぬ神。
 - b 諸仏菩薩の靈驗に関わるもの——薬師如来の靈驗、観音の靈驗、地藏の靈驗、不動の靈驗、弘法大師の靈驗、阿弥陀の靈驗、仏舍利・如意宝珠の靈驗。
 - c 来世での報い——地獄界へ堕ちる話、野槌・馬・犬・雉など畜生界に転生する話。
 - d 和歌陀羅尼論——歌の功德で命が助かる、神仏から歌を授かる、歌で自分の死を報せる、死者と歌を交わす。
 - e その他——仏典の夢譚の引用、殺生の戒め、滑稽譚。
- そして以上から、『沙石集』における夢譚の特徴として、以下のことが指摘されうる。
- a 従来の現世利益的な神祇信仰が見られる夢譚は少なく、むしろ和光の方便として、仏の代理を神が務める話が多くなっている。